

動脈硬化症のトピックに関するシンポジウム －分子機序から診断と治療への展開－

大内 尉義¹ 横山 光宏²

動脈硬化の臨床、基礎および橋渡し研究のおおの領域で目覚ましい進歩がみられる。本シンポジウムでは各領域で活躍中の演者の方々に最新の研究成果を発表して頂いた。

心血管病、動脈硬化の日本を代表する疫学調査である久山町研究の最近の研究成果を清原裕氏に発表頂いた。久山町研究から脳卒中および虚血性心疾患の時代的変遷について解説された。脳卒中(脳梗塞)などの高血圧性心血管病が減少し、糖尿病やメタボリックシンドロームなどの代謝性心血管病が増加するという時代を経ての変化が特徴的に示された。

分子生物学的手法を用いての基礎研究の成果を2人の演者から報告頂いた。山内敏正氏は動脈硬化性心血管病の重要な危険因子として注目されているメタボリックシンドロームの病態形成についてのアディポカインネットワーク破綻の役割とPPAR γ 作動薬やRAS抑制および酸化ストレス消去等による悪循環解除による治療の可能性を解説した。心血管イベントは不安定(脆弱)プラークの破綻によって生じるが、佐田政隆氏は血管プラークの進展と脆弱化の機序について研究し、血管組織のレニン・アンジオテンシン系が酸化ストレスを増大し、炎症反応を引き起こすことが重要であり、さらに骨髄のレニン・アンジオテンシン系と骨髄由来の平滑筋形質を有する前駆細胞も重要な役割を果たしていることを示した。

粥状硬化の診断面では画像診断の進歩が目覚ましいが、代田浩之氏は粥状硬化性狭窄病変の診断における

MDCTの有用性に始まり、不安定化プラークの画像診断について解説した。頸動脈の不安定化プラークの非侵襲的診断におけるBモード超音波とMRIの有用性を紹介した。冠動脈プラークの質的評価に血管内超音波(IVUS)とoptical coherence tomography(OCT)を用いての侵襲的な検査法を紹介した。さらに頸動脈を中心とする末梢動脈の炎症といった病態をPET画像を用いて診断する試みについても紹介した。

志手淳也氏は冠動脈病変に対してIVUSによる仮想組織性状診断(VH-IVUS)とOCTを併用することによって不安定化プラークの定量的評価を行った。この方法を用いることによってピオグリタゾンの投与がプラークの安定化をもたらすことを示し、血中アディポネクチン量の上昇と相関することも明らかにした。本法はプラークの安定化戦略の効果判定に有用であると思われる。

動脈硬化診療ガイドラインはクリニカルエビデンスに基づいて作成されるが、寺本民生氏は5年ぶりに改訂された動脈硬化性疾患予防ガイドライン2007年版について最近のNIPPON DATA80という大規模疫学調査結果やMEGA studyやJELISなどの大規模臨床試験結果がいかにしてガイドラインに取り入れられたかについて解説した。また、患者カテゴリー分類の改定、NIPPON DATA80に基づく評価チャートや管理目標としてのLDL-Cの低下率、non-HDL-Cなど他の改訂のポイントについてもその背景を解説した。

本誌に投稿いただいた論文を以下に掲載した。

¹東京大学加齢医学

²兵庫県立淡路病院